

## *Always Looking Up: The Adventures of an Incurable Optimist* by Michael J. Fox



東京学芸大学名誉教授 倉持 三郎

*Always Looking UP* は Michael J. Fox の自伝 *Lucky Man* (2002) の続編である。文英堂の英語教科書 *New Edition POWWOW ENGLISH COURSE I* の第 4 課は *Lucky Man* の一部を取っている。そのなかでは次のようなことが書かれている：

Fox はカナダに生まれたが、高校を卒業しないうちに、俳優になるためハリウッドにきた。イギリスの詩人バイロン卿は詩集を出したとき、「朝、起きてみると有名になっていた」と言ったが、Fox も同じように、映画界に入るとすぐに有名になった。家のガレージには高級車が並び、仕事は順調で、順風満帆の生活であったが、突然 Fox に不幸がやってきた。1990 年のある日の朝、目覚めてみると突然左手が震えていた。診察してもらったらパーキンソン病ということが分かり、ショックを受ける。この病気は加齢によって起こるのがふつうで、40 歳にならない自分がかかってしまったことを嘆いた。

はじめ Fox は、薬を服用して手が震えるのを防いだ。パーキンソン病の原因は、中脳の黒質神経細胞が減少することで、そこで生産される神経伝達物質のドーパミンが減ることによって起こる。潤滑油がなくなり機械がうまく動かないのに似ている。したがって、対症療法としてはドーパミンの分泌を促す薬を服用することなどがある。Fox も薬で抑えて、しばらく他人には隠していたが、ドラマ *Spin City* を製作することでもう隠しておくことができなくなり、1998 年に公表し、それはテレビや新聞のトップ記事として報道される。

発表することによって、Fox はアメリカで 150 万もの人が同じ病気で苦しんでいることを初めて知り、治療のために尽力することを決心する。アメリカ上院の公聴会に出席して、この病気の治療のために国家予算をつけてもらうように訴えた。公聴会では、予算さえつければ、10 年くらいで治療法が確立するという専門家の証言もあった。

Fox は自分が不幸な人間ではなく“Lucky Man”である、と思う。なぜならば、順調な一生を送ってしまえば、他人と同じような平凡な生活しか過ごすことができなかつたであろう。パーキンソン病にか

かることによって、他の多くの人が絶対に送ることができない人生を送ることができる。病気は自分に与えられた贈り物である。それを受け入れて生きようと考える。

今回の Fox の著書は、*Lucky Man* に続くものである。新著の題名は『つねに上を向いて——救いたい楽天主義者の冒険』という意味である。「つねに上を向いて」は、Fox は身長が 5 フィート 5 インチしかなかったため、他人と話すときはいつも見上げなければならなかったという意味だが(彼は、つねにユーモアを忘れない)、もちろん精神的な意味でも使われている。前途に希望を持って生きることである。本書は「仕事」、「政治」、「信仰」、「家族」の四つの章に分かれている。

「仕事」の章では、まず 2000 年に約 20 年間の俳優生活にピリオドを打ったことが書かれてある。脳の手術も受けたがはかばかしい回復はせず、仕事を満足に続けることが出来なかったからである。やめてから「マイケル・J・フォックス財団」をつくり、基金を集めてパーキンソン病治療の研究を助成するキャンペーンを始めた。

「政治」の章は本書の中心である。治療研究のために政治家に働きかけるという活動について書かれている。教科書にもあったが、上院の公聴会に出席して証言したことにつながる。その公聴会では、国家予算をつけてもらうことを要請した。エイズ対策の国家予算に比べるとパーキンソン病対策の予算は極端に少ないのである。また政治家に働きかけることにした背景には、Fox が 2000 年になってようやくアメリカの市民権を取得し、投票できるようになったことがある。自分が投票できないのに他人に投票を呼びかけられないからである。

以前は予算を増額してもらうことを政治家に要請したが、今度は別の問題があった。*Lucky Man* の最後で少し触れられていたが、治療に胚性幹細胞 (embryonic stem cell) を使うという問題である。

この細胞はヒトになる細胞で、筋肉細胞、脳細胞、腎細胞などに分化し得る。この細胞を患者の脳の黒質に入れればドーパミンを分泌することになるだろう、というのである。

しかし、これには倫理問題がからまっている。アメリカには、今なお中絶に対して強い反対がある。Pro-life と呼ばれる一派は、「どんなに小さくても胎児は人間である」という考えで中絶に反対する(他方で Pro-choice と呼ばれる一派は、「生むか生まないかは女性自身を選ぶことができる」という立場である)。これについて Fox はこう説明する。胚性幹細胞利用は中絶とは違う。不妊クリニックで体外受精によって受精した受精卵は、できてから数日間は「点」のように小さい。その大部分は捨てられるが、捨てないでパーキンソン病のため特別に利用するのだ。現在ではアメリカで 10 万もの受精卵が保存されている。

民主党は胚性幹細胞研究に賛成しているが、2000 年の大統領選挙では、共和党の George W. Bush が民主党の候補者を破り当選した。Bush は選挙公約の通り、信仰上の理由で胚性幹細胞研究促進法案に拒否権を発動した。Bush は 2004 年の大統領選挙でも再選した。2006 年の中間選挙の際、Fox は不自由な体で促進法案賛成候補者の選挙遊説について回った。大統領に拒否権を使うことを許さないためには下院、上院の両院で veto-proof margin (拒否行使に対抗できる票差) である 3分の 2 の議員の賛成を得なければならない。定数 435 の下院で 290、定数 100 の上院では 67 の賛成が得られれば、大統領は拒否権を発動できないから、法案は成立する。そのために賛成する議員の当選を応援した。

本書のなかで Fox は、2008 年 11 月に民主党の Barack Obama が大統領に当選したので胚性幹細胞研究に国家予算をつけてくれるだろう、と書いている。実際に Obama 大統領は 2009 年 3 月、「医学上の奇跡は偶然には起こらない」と述べて、Bush の胚性幹細胞研究禁止を解除した。Fox の運動は実を結んだ。なお 2006 年に京都大学の山中伸弥教授が開発した、胚性幹細胞とほぼ同じ働きをする、人工多能性幹細胞 (iPS 細胞) は倫理問題をクリアできるので宗教界から歓迎されている。

「信仰」の章では Fox は自分の信条を述べている。妻 Tracy の宗教はユダヤ教の一派であった。Fox はそれに入信したわけではないが、子どもたちはユ

ダヤ教で育てることにした。キリスト教徒は胚性幹細胞研究に反対するが、ユダヤ教は科学の進歩を重んじるという。特定の宗教ではないが Fox は自分よりも大きい存在があることを信じている。病気も何も、その存在が人間に与えるものなのである。パーキンソン病が「贈り物」であったように、人生そのものもその存在者からの贈り物であると考え、Fox は “Life is a gift.” という信仰に達する。どんなに苦しい人生でも、それは自分に与えられた「贈り物」である。

「家族」という章では、戦う Fox を支える家族のことが書かれてある。まず妻の Tracy が献身的である。Fox には 4 人の子どもがいるが、子どもたちも生きる力を与えてくれる。

本書を読むと “Life is a gift.” という著者の言葉が実感される。「人生は贈り物」であるならば、どんなに苦しくてもがんばろうという気持ちがわいてくる。そして、どんな難しい問題でも、それを打開する方策があり得る。あきらめしないで、その方向に進むべきであるというメッセージを読みとることができる。

Lesson **4** **A LUCKY MAN**  
by Michael J. Fox

アメリカの映画スター、マイケル・J・フォックスはある困難を抱えています。彼がどのようにそれを乗り越えていくのか自伝を読んでみましょう。



A



B



C



D

**Listen** 英文を聞いて、それぞれにあてはまる写真の記号を答えなさい。

New Edition POWWOW 英語 I LESSON 4